一般誌を対象とする記事索引の現状

菊池しづ子

1. はじめに

本稿は、国立国会図書館編「雑誌記事索引」、日外アソシエーツ編「ジャーナルインデックス」、大宅壮一文庫編「大宅壮一文庫雑誌記事索引総目録」の主にWeb版について、一般誌を対象とする記事索引という観点から比較分析し、一般誌の記事索引の現状を明らかにしようとするものである。以下の記述においては、「雑誌記事索引」を「雑索」に、「ジャーナルインデックス」を「ＪＩ」に、「大宅壮一文庫雑誌記事索引総目録」を「大宅文庫」に各々略して表記する。カッコのつかない雑誌記事索引という語は、一般名詞として使用する。

国立国会図書館は、戦後設立された直後から、全分野にまたがる雑誌記事索引を継続して刊行してきた。この「雑索」は主に学術雑誌の記事を採録する、大学等の紀要はかなりの割合で採録されるが短期大学、高等専門学校の紀要は含まれない、という特徴で知られてきた。

その後さまざまな分野ごとの索引や書誌が多く作られるようになり、近年では人文社会系の研究や調べものを行う人々は、カレントな国内雑誌の記事を探す場合には、まずは「雑索」と、それに加えてそれぞれの分野で作られているいくつかの索引誌を知っていれば、分野によって異なるが、まあまあの再現率で記事を知ることが出来るといってよい状況に到った。まあまあの、と述べたのは、人文社会系では必要とされる文献の範囲が、雑誌記事だけをとってみても非常にあいまいなので、学術雑誌とされているものだけでは、テーマによっては必ずしも十分ではないからである。

加えて、従来なかったような切り口や発想による研究や学際的な研究が広がっていること、いわゆる学術研究以外にもいろいろな興味や関心を持つ人々による知識に対するさまざまなアプローチが広がっていること、学術雑誌は一部の研究者にとっては死活に関わる重要性を持つが、それを必要とする研究者の数そのものはかなり少ないのに対し、一般誌には桁違いの読者数があり、その記事に対する潜在的な需要はかなりあるということなどの状況を鑑みれば、「雑索」にごく一部の一般誌しか採録されなかったのは非

常に不便なことであった。さらに、最近では、インターネットの普及により、情報を検索して入手するということが一般化し、それとともに文献の検索と入手も当然のこととして要求される傾向が以前より強まっているように感じられる。ここで一般誌というのは、書店の店頭で販売されるような、総合誌、婦人誌、ファッション生活誌、趣味関係誌のほか、タウン誌、PR 誌などを含むものと考える。

一般誌を対象とした索引について考える際しばしば思い起こされるのは、“わが国には米国の‘Readers' guide’にあたるものがない”、という図書館員の中で長く言われてきた常套句である。“Readers' guide”とは書誌索引出版社として長い歴史を持つアメリカの H.W.Wilson 社が1900年から出している“The Readers' guide to periodical literature”のことである。“Readers' guide”は書店の店頭に並ぶような誰でも知っているようなごく一般的な雑誌を索引化したものであり、非常に手間がかかりページもかさむ辞書体目録の形式で作製され、さらにまた手間をかけて累積版を繰り返し作るという、同社のほかの書誌・索引類と共通したその索引の形式は、索引のひとつのモデルとなってきたものである。“わが国には・・・”というのは、たとえば、高校生に図書館利用教育を行う際に、図書以外の雑誌の記事にも目を向けるようにと指導しようにも、「雑索」では収録雑誌が紀要や学会誌が主なので、高校生には適切でない、“Readers' guide”のようなものがあれば、彼らにも馴染みがあって入手しやすく読みやすい一般雑誌から記事を探すことが出来るのに、といったニュアンスである。

このような状況が変化したのは、「雑索」にだいぶ遅れたとはいえ、一般誌対象の記事索引として「ＪＩ」と「大宅文庫」のふたつが1980年代に出現したことであった。

書誌・索引というわが国では理解されにくい分野の専門出版社として努力を重ねてきた日外アソシエーツ（以下日外と略す）は少なくとも傍から見る限り、日本における“Readers' guide”の不在を埋めるものを作ろうとしたのではないかと思われる。同社は1980年頃からあれこれと冊子体で試行錯誤した後、「ＪＩ」をデータベースで頒布するようになった。CD-ROM 版、インターネット普及後は単体としてだけでなく、日外が提供するデータベースサービス MAGAZINEPLUS のなかに含めた形でも提供するようになった。この MAGAZINEPLUS には日外が作成した索引である「ＪＩ」のほかにオリジナルの学術論文関係のいくつかの索引ファイルや外部から導入した「雑索」などのファイルを含むが、「雑索」「KSK」以外のファイルは既に全て終了し、「ＪＩ」もまた2003年４月に終了した。このように MAGAZINEPLUS の状況はこの数年で大きく変化してきているが、そのことについては次節で詳述する。

「雑索」に無視された一般誌を対象とする記事索引として、「大宅文庫」も時を同じくして1985年に冊子体が出版され、CD－ROM 版、インターネット上の Web OYA bunko

でも公開されるようになった。

これら3者の概要については表1にまとめた。詳しいことは本文で説明する。

表1　「雑索」「ＪＩ」「大宅文庫」の概要

	「雑索」	「ＪＩ」	「大宅文庫」
印刷体	「雑誌記事索引」1948-1995 刊行頻度は時によりさまざま 「雑誌記事索引」人文・社会編 累積索引版1948-1989	週刊誌記事索引1981-89 総合誌記事索引1981-94 ビジネス誌記事索引1981-87 上記は「ＪＩ」の一部を含む	「大宅壮一文庫雑誌記事索引総目録」1985，1985-1987，1988-1995
CD-ROM	雑誌記事索引CD-ROM カレント版1985～ 遡及版CD-ROM, DVDあり	CDジャーナルインデックス 1981-2000	CD-ROM大宅壮一文庫雑誌記事索引　1988～
Web	国立国会図書館雑誌記事索引 1948～ アクセスは 国立国会図書館OPAC NACSIS-IR（個人利用制限あり） MAGAZINEPLUS 日外は単独でも提供してきた (2005年3月まで)	ジャーナルインデックス単体 （2003年4月まで）または MAGAZINEPLUSのなか アクセスは WEB/NICHIGAI ASSIST NICHIGAI/WEB	Web OYA-bunko 1988～
収録誌数	15278誌うちカレントなものは 9524誌（2004/8 発表データ）	のべ約170誌 カレント約100誌	のべ約1000-2000誌 カレント約300-500誌
収録時期	1948～	1981～2003	明治～　文庫設立は1971年

「大宅文庫」を中心に、一般誌の索引化状況については、1991年に水上がよくまとまった調査を発表しており有用である[1]。しかし当時はまだインターネットが普及しておらず、なによりも「雑索」が一般誌を収録するようになる前であった。そこで、本論ではこのようなさまざまな変化を経たうえでの現在の一般誌の索引化の状況についてまとめ、さらに問題点を指摘しようと思う。

2. 採録誌における3者の関係と「雑誌記事索引」の変貌

1995年をもって国立国会図書館は印刷体の「雑索」の刊行を終了した。データベースのみの提供という方針変換に際して、それまで印刷体刊行のために費やしていた労力を採録誌拡大という面に向けるという決定がなされたようである。

1996年、採録誌は約3100誌から約5500誌に拡大された。このときの増加はかなり本質的な変更であって、学術誌に限らず一般的な雑誌に対象を広げるもので、一部週刊誌も採録されることになった。1999年には調査・研究用に有用な雑誌を加えて7100誌となり、2000年には短大・高専の紀要を含め紀要類の網羅性を高めて9000誌に拡大した。この拡

大作業において、所蔵雑誌の見直しや、受け入れ遅延資料の見直しはしていない、という[2]。特に、96年の一般誌採録の急増は“学術雑誌の「雑索」”という従来の強いイメージを劇的に変えるものであり、2000年に従来の“短大紀要は含まない”、という方針を払拭したこととともに、国立国会図書館が「雑索」をもってあらゆる雑誌の索引としてオールマイティに使えるものにしようとしていることを示していると思われる。

一方、日外は、2003年４月末日をもって、(単独の)「ＪＩ」の提供を終了し、2005年3月末日をもって（単独の)「雑索」ファイルの提供を終了予定と発表している[3]。「雑索」の終了は、「雑索」が国立国会図書館の OPAC を通して自由に使えるようになったため、有料のサービスに意味がなくなったからという単純なことだと思われるが、「ＪＩ」の終了は明らかに「雑索」の採録誌拡大の影響によるはずである。この関係を具体的に調べてみよう。

表２　索引件数

	MAGAZINEPLUS ファイル*			
	全ファイル	「雑索」のみ	「ＪＩ」	「大宅文庫」
1995年4月	14643	7358	**3969	8946
2000年4月	33883	25937	**6506	10155
2004年4月	23846	22540	***差1306	15240

* 国立国会図書館OPAC の「雑索」では期間だけ入力して検索することができないので、MAGAZINEPLUSを利用した。なお「雑索」のデータは後からも追加されるらしいのでわずかずつ増加している。

** MAGAZINEPLUS では、「雑索」ファイルのみに限定した検索することは出来るが、「ＪＩ」ファイルだけに限定して検索をすることが出来ない。また既述のように単体としての「ＪＩ」の提供は終わってしまったので「ＪＩ」ファイルだけの検索ができないのである。それで2000年4月まで収録しているＣＤ―ＲＯＭ版を使った。

***上記の理由から2004年は「ＪＩ」ファイルというもの自体が存在しない。しかし、この時期は他のファイルといえばKSKファイルくらいしか含まれないので、「ＪＩ」を引き継いでいる分は500件から800件の間くらいかと想像される。

表２は、1995年、2000年、2004年、各年の４月１ヶ月間の各々の索引件数である。

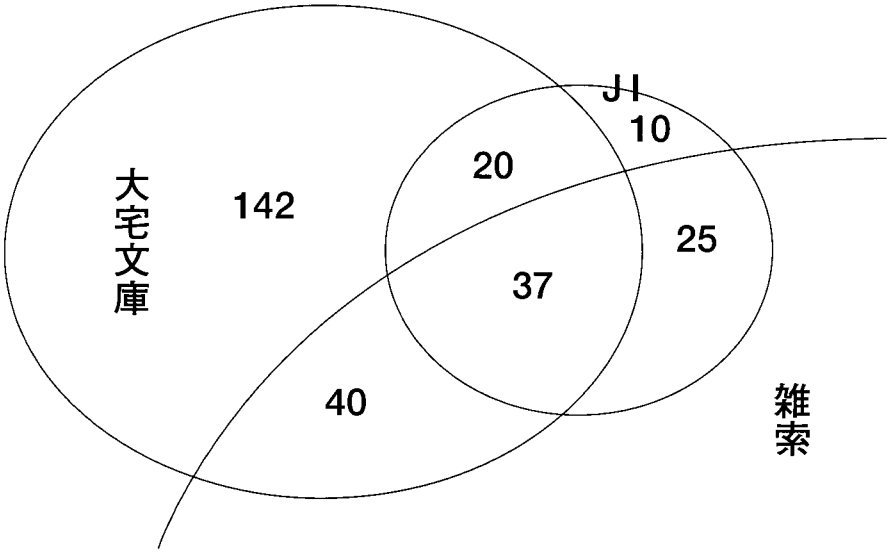
この結果は１ヶ月間なので、年刊、隔月刊や不定期刊の雑誌は含まれないが、ここで調べようとしているのは一般誌なので差し支えないと考える。また、採録状況は揺れ動いているので、注を参照の上、およその状況だと理解して欲しい。

「雑索」は1996年以降収録雑誌を増やしたことで索引数が急増している。2003年より「ＪＩ」は中止になったために、2004年には「ＪＩ」というファイルはないわけだが、

日外では“MAGAZINEPLUSのなかで総合誌・学会誌などを増強する”、とホームページで発表しているので、その日外が増強した部分を便宜的に「ＪＩ」ファイルと呼ぶことにするが、表2にあるように件数自体は激減している。

そこで、この実態をもっと詳しく調べてみることにした。図1は2000年4月1ヶ月間に索引になった記事の載った雑誌のタイトルの重複を示したものである。「雑索」の集合は大きくはみ出しているとみなして欲しい。

図1　2000年4月時点での採録誌の重複



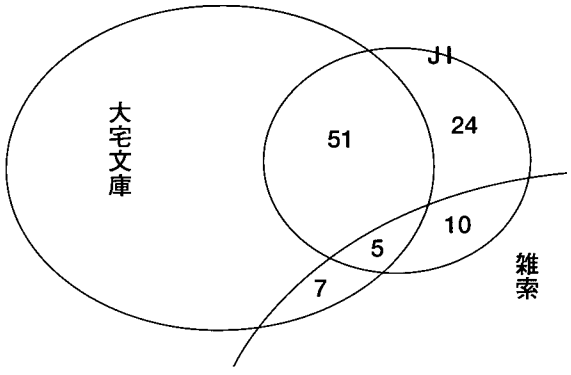
2000年4月において「ＪＩ」のみが採録対象としている雑誌はわずか10タイトルであり、もともと採録誌の絶対数が少なく、また「大宅文庫」より「雑索」に近い雑誌の選択傾向を持つ「ＪＩ」にとって「雑索」の採録誌拡大が致命的な影響を及ぼしたことがはっきりと見て取れる。「大宅文庫」にとっても「雑索」の影響は無視できないと思われるが、もともと「大宅文庫」は採録誌数が「ＪＩ」より多く、また「雑索」が少なくとも現時点では採録対象としないような雑誌を数多く収録しているので「ＪＩ」が蒙るほどの影響ではないし、実際この後も採録雑誌を拡大しつつ、索引件数を増やしている。すなわち「ＪＩ」の存在意義は採録誌という側面に限っていえば極端に弱いものとなったのである。

2000年4月だけで見る限りでは、「雑索」が「ＪＩ」あるいは「大宅文庫」と重なるタイトルは102ある。このうち「雑索」において96年以降に採録の始まった雑誌はなんと80タイトルに及ぶ。このうち5タイトルは96年以降に創刊された雑誌なので、「雑索」

が採録範囲を広める対象となったか否か判断できないので除いて考えると、75タイトルが加わったわけである。これをためしに引いてみたのが図２である。

「雑索」が「ＪＩ」あるいは「大宅文庫」と重複するタイトルはわずか22タイトルである。（これは仮定の話であって95年以前にこのような数字だという意味ではない。特定の時期を決めて採録状況を正確に比較することは、雑誌の刊行状況と採録状況が固定していなければ複雑極まりない作業となるので行わなかった。）

図２　もし「雑索」が以前のままだったら



2000年４月時点で「ＪＩ」が「雑索」と重複しない30タイトルが2004年10月でどうなっているかというと、検索結果から推定する限りでは、30タイトルのうち廃刊誌が８誌もあるが、その他の22誌のうち８誌継続、14誌中止であった。「ＪＩ」のみに収録されていたわずか10誌は廃刊誌も含めて全て中止となった。「雑索」と重複している場合は調べにくいが、『中央公論』や『文藝春秋』では「雑索」のみを対象にした場合と全ファイルを対象にした場合とで検索結果（件数）が異なったので（後述）、多分日外アソシエーツでオリジナルのデータを加えているのだろう。しかしデータの作成を止めた雑誌が多いようである。一方、発表されてはいないが、2004年になって新たに採録した雑誌もあるようで大変わかりにくい。少なくとも外部からの導入データベースである「雑索」と、日外作成のデータベースとは区別ができるようにして提供して欲しいものである。ともあれ、従来の「ＪＩ」にあたる部分が大幅に縮小されているのは確かである。

ところで、雑誌記事索引を複雑なものにし、また利用する側にとって非常にわかりにくくまた誤解しやすいものとしているのは、ある雑誌が採録対象となっていると発表されているからといって、創刊あるいは索引開始時から廃刊まで、しかも一貫した基準で記事が選ばれていることはむしろ稀といってよいくらいだということである。さしあたって、採録誌の選択と期間についてここで説明しておこう。記事選択基準については次節で述べる。

上記の「雑索」のように、大々的に方針が変われば多くの雑誌が途中から採録されるのだが、これはまだわかりやすい。実際にはもっと複雑なことが多々生じている。「雑

索」が1996年以降新たに取り上げた雑誌のうち「ＪＩ」あるいは「大宅文庫」と重なる上述の75タイトルのうち、11タイトルは、かつて「雑索」開始の1948年には採録していたが、数年でやめてしまったタイトルだった。つまり「雑索」は初めはむしろ広範囲の雑誌を収録していた、というより、当時は雑誌自体が極めて少なかったので、ほとんどの雑誌を索引化することができたのらしいが、雑誌のタイトル数が増えて追いつかなくなったのか、新しいタイトルを加えるとともに、かなりのタイトルを1950年代に採録中止してしまい、96年以降になって再び採録したということなのである。「雑索」創刊時1948年に採録されながら数年で見捨てられた雑誌の一例を挙げれば『文藝春秋』がある。『文藝春秋』という雑誌は、学術的か否かという採用においてちょうど境界線にある、一つの目安となるような雑誌のひとつなのである。そういった雑誌のほとんどが96年以降の見直しで再採録されることになった。こういったこととは別に『法学セミナー』のように、1967-85、そして91年再採録というようなわかりにくいものもたくさんある。さらに、新たに採録したのに内容が基準に合わないのか、受け入れが不安定なためかわからないが、またすぐ止めてしまった、などというものもある。国立国会図書館ではOPAC において採録基準を明示し、採録誌一覧に採録時期まで含めて載せており、私が知る範囲ではこのデータは信頼できるようである。ちなみに、こういった調査作業の中で、国立国会図書館は私が今まで想像していた以上に雑誌を所蔵していない、ということに驚いた。

「ＪＩ」の場合、2000年分まで収めた CD-ROM 版では採録期間も含めた雑誌一覧がついているが、Web 版では主要採録雑誌一覧しか載せていない。廃刊になったのでもないのに止めてしまったもの、長い歴史があるのについ最近採りはじめたものなど数多い。

「大宅文庫」にいたっては、文庫設立以前はともかく、データベースになってからの時期だけ見ても、採録はきわめて不安定である。1件だけ記事を採ってそれきり止めたもの、数年採って、次の数年は年に数件だけ採り、ある年から本格的に採りはじめたものなどいくらでもある。もちろん使い方を見れば採録がまちまちだということは一応書いてはあるが、このことは利用者に対して大きな不安をもたらす。ある雑誌の記事が1件だけ検索されたときの利用者の困惑を想像してみて欲しい。ホームページに公開されている主要採録雑誌一覧は、文字通り一部にすぎず、検索画面で選ぶようになっている約1000タイトルの雑誌にしても、収録時期や記事選定の実情まではわからない。

一方雑誌そのものの変化が激しいことは言うまでもない。たとえば日外のホームページに載っている採録雑誌165タイトルのうち69タイトルは廃刊雑誌であった（タイトル変更によるものを含む）。そのほかタイトルの度重なる変更、刊行頻度の変更など雑誌

はめまぐるしく変わるものなのである。

3. 採録記事の選択について

一般に利用者はどの雑誌が採録されているかということだけを気にしがちだが、採録された雑誌の中でどのような記事がどのくらい索引化されているかということもそれに劣らず重要である。一例を挙げると、「雑索」で書評を探してもめったに見出せないということがある。というのも、「雑索」では原則として3ページ以上の記事を採録することにしており、多くの書評は3ページに満たないからである。一方「大宅文庫」では、記事種類のなかに「書評」という項目があるくらいだから、何万件もの書評が入力されている。そこで記事の採録状況について具体的に比較してみることにしよう。表3、表4は、2000年4月の『週刊新潮』と、2004年4月の『中央公論』の記事の採録状況である。

表3 『週刊新潮』2000年4月6日号

	「雑索」	「ＪＩ」	「大宅文庫」
総件数	16	57	62
3p以上	3	6	6
1-3p	12	44	40
1p未満	0	7	16
特殊な索引	＊特集全体1	0	0
連載小説	採らない。ただし2004年には採録している	採らない	採らない
グラビア	量が多くてもグラビアは採らない	13	12
書評	0	1	2
補足	大きな特集のなかの個々の記事は3p未満でも採ることもある		書評も小さいのは採らない。小さい記事の採否はまちまちで1-2pあっても採らないものもある

＊特集記事がある場合、特集記事全体でひとつの記入を作ること

表4『中央公論』2004年4月号

	「雑索」	MAGAZINEPLUSで加えた分	「大宅文庫」
総件数	45	54（重複32）	77
3p以上	39	28（重複28）	40
1-3	1	22（重複0）	34
1p未満	0	0	0
特殊な索引	特集全体5	特集全体4（重複4）	特集全体1 ＊＊連載について2
連載小説	4	0	2
グラビア	4	0	9
書評	1	4	6

＊＊ 連載記事の1回目、最終回では、そのことを示すために、一本の記事に対して普通の記入と“連載開始”といった注をつけた記入との2本の記入を作っている。

「雑索」が採録誌を増やした（『週刊新潮』もそのひとつ）といっても、採録される記事の数は他の索引と大きな差がある。「雑索」は原則として3ページ未満のものは採らない。『中央公論』で1件載っているのは特集の見出しの下に小さい記事が6件あるうちひとつだけ出てきたものなのでミスかもしれない。あるいは3ページにわたっているせいで実質1ページ強の記事を採ったのかもしれない。『週刊新潮』で3ページ未満の記事を12件も採っているのはむしろ例外にあたり、一般には特集で3ページに満たない記事が集まっている場合にはまとめて特集としての記入を作って個々の記事は採らない。いわば合集のタイトルの記入だけ作って細目を載せないようなものである。これに対し「大宅文庫」では個々の記事ごとに記入を作り、特集タイトルはシリーズ名のように扱っている。「雑索」はグラビアは週刊誌では採らないが、月刊誌では3ページ以上あれば採るらしい。

『週刊新潮』で3ページ以上あるのに除かれてしまった連載小説が『中央公論』では全て採られている。小説としての価値が異なるとは思えないと考えて調べていたら、2004年には『週刊新潮』の連載小説も採録されている。念のため『週刊文春』でも調べてみたところ、2000年には検索できなかった連載小説が2004年には出てきたので、週刊誌の連載小説も採録することにしたのだろう。内部では様々な微少な変更が行われているらしいことが想像される。

それにしても「雑索」がページ数だけで採否を決めるのは適切なのだろうか。『週刊文春』では恒例のエッセイが9本載っているが3ページを費やしている1件だけが採録され、残りは全て2ページなので採られていない。また定評のある書評のコーナーも全く採録されていない。

「大宅文庫」が最も多く記事を拾っているが、なぜ連載小説を4本のうち2本だけしか取らなかったのかはわからない。またどうして漏れたのかわからないが採録されない記事がいくつかあった。

2004年は「ＪＩ」はもう終了した後だが、『週刊新潮』では「雑索」単体での検索結果と MAGAZINEPLUS 全ファイルでの検索結果が同じ（表にはそのデータは載せていない）なのに対し、『中央公論』では MAGAZINEPLUS の方だと「雑索」単体の倍以上の件数が検索される。これはつまり日外がまだオリジナルの索引作業を行っている（増強した）ということを示している。「雑索」本体になんらかの付加価値をつけて提供することによって「雑索」単体と MAGAZINEPLUS との差をつけようとしている、または MAGAZINEPLUS の存在意義をあらしめようとしているのかもしれないが、利用者にとっては非常にわかりにくい。

わかりにくさを具体的に説明すると次のようである。MAGAZINEPLUS 全ファイルで検索したら99件検索されたので、当然はじめは「雑索」の45件に日外が54件加えたのかと思ったが、一覧表示して記事を見ていったところ、まず「雑索」の45件が並び、その後に既に出た記事と新たな記事が混ざって54件並び、「雑索」の45件と重複するものを除いたら、実質的には「雑索」とは別の記事が22件だけ加わっていたのだ。ただ、後半の54件では重複する記事でもタイトルの書き方が違うので、もしかしたら MAGAZINEPLUS のオリジナルデータかとも思われるが、それにしては大きな記事が、いかにも「雑索」のリストで既に出たので省いたといわんばかりに抜けているのも奇妙である。そもそも、検索結果として同じ記事が重複して出てきて実際には67件なのに99件だと表示されるのはシステムとしておかしい。

4. 検索システムと件名について

本稿では、詳しい検索システムの比較は行わなかったので、およそのことだけを指摘しておこう。ここで比較したのは Web のシステムだけで、国立国会図書館 OPAC の「雑索」、MAGAZINEPLUS、Web OYA-bunko である。システムとして最も洗練されているのは言うまでもなく「雑索」で、それを使いこなす利用者がどれだけいるかは別としていろいろのことができる。最も融通の利かない、多様な検索のできないのが MAGAZINEPLUS であるということも断言してよいだろう。MAGAZINEPLUS は特に

文字の入れ方の融通性がないことが大きな欠点である。「雑索」では面倒ではあるが、コマンド検索的にブール検索すなわち and or not でキーワードを複雑に組み合わせることができる。and or not は「大宅文庫」や MAGAZINEPLUS にも一応用意されているが枠が決まっており、MAGAZINEPLUS の方が入れられる語が少ない。一方検索結果は、「雑索」では200件、MAGAZINEPLUS では1000件までしか表示されないので絞り込む必要があるのに対し、「大宅文庫」では何万件でも表示することができる。

概して、CD-ROM の方が Web 版よりも機能が充実していることが多く、トランケーションや、キーワード一覧などの機能は CD-ROM には用意されている、という場合が多いので、検索の機能を考えた場合、諸条件にもよるが、あえて CD-ROM を使う（図書館では購入する）ということも考慮すべきである。アクセスのし易さだけでは索引は選べない。

検索システムの比較についてはここまでにして、索引で最も大切な索引語としての件名（descriptor）についてふれておく。件名は、「雑索」にも「ＪＩ」にも全く用意されていない。一方「大宅文庫」の最大の特徴は、詳細な分類表が用意されその項目を検索するための7万項目もの膨大な件名索引があること、件名の一種であるが一般件名とは別に詳細な人名索引があること（いかにもマスコミ向けらしい）、さらに記事のおおまかな種類（インタビュー、グラビアなど6種、これが実に便利）の選択ができることである。大宅壮一という利用者が利用しやすいように作らせた索引だからであろう。利用者志向の索引には件名があるべきなのである。

件名が用意されていないのは同じでも、MAGAZINEPLUS は「雑索」よりずっと影響力が小さいし、もはや過去のものになりつつあるので「雑索」についてだけ言及しておきたい。

私は率直に言って「雑索」は欠陥索引に近いものだと考えている。どのように索引ソフトを向上させたとしても、もともと入力されていない情報が検索されることはありえない。国立国会図書館が標準的で最も大規模な雑誌記事索引を作るのなら、件名を入れるべきだと思うが、それは行われていない。つまりあるテーマに関する記事を探す場合、そのテーマを示す入力したキーワードが記事のタイトルに含まれていない限り見出すことができない、キーワードのコントロールがされていない、という文献検索システムは好ましくない。

冊子体の時代、記事は配列しなければならなかったため、必然的に内容によって分類体系の項目の下にまとめられていた。これは書架分類のようなもので不十分なものではあるが、少なくともひとつの項目（件名）が与えられていたことになる。国立国会図書館の逐次刊行物部索引課は、冊子体の刊行を止めるということは配列をしなくてすむか

らといって、分類付与をしないことにしてしまったのである。“その労力を採録誌の拡充に当てることを決めた”と述べ、“主題を示すフリーワードなどアクセスポイントの充実を計画している”とも書かれているが[4]、それから10年経つが変わっていない。結果として「雑索」において分類項目で検索できるのは1995年分までである。件名付与作業と採録誌拡大はなにも二者択一のものではないだろう。確かに10000誌もの雑誌の索引作業は大変な労力だろう。しかし週刊誌は少ないし、紀要や年報などの多くは年１回しか刊行されない。一般誌を対象としている「大宅文庫」が25分の１ほどのタイトル数で、１年間に「雑索」の半分強の数の記事を索引化していることと比べてみれば、大変でないなどとは決して言えないが実際は10000という数のもたらすイメージほどではない。財政難の折ではあろうが、国立国会図書館がもっと利用者のことを考えた索引作りを考えてくれることを願うものである。

5. まとめ

以上の調査からわかったことを以下にまとめる。

1.「雑索」は以前の「雑索」とは全く違う内容のものになり、かなり多くの一般誌が採録されている。

2. しかし「雑索」は採録誌数は多いが採録記事の数が少なく、３ページ未満の記事は原則として採らないので、実際上は検索できないものが多い。グラビアはページ数があっても採らない場合もある。従って、目的にもよるが、多くの場合、「大宅文庫」と重複するものについては「大宅文庫」で補う必要があるだろう。そして学術雑誌が比較的シンプルな構成なのに対し、一般誌の構成、内容は複雑きわまりないのでその部分でこそ「大宅文庫」が役に立つ。

3. MAGAZINEPLUS に含まれていた「ＪＩ」「JOINT」やそのほかいくつかのファイルは既に編纂を終了しているので、MAGAZINEPLUS に含まれているのは「KSK」と「雑索」に日外のオリジナルデータが幾分加わったもののみになっている。「雑索」は今日国立国会図書館の OPAC で誰でもアクセスできるから、オリジナルのデータの数が少なく内容がはっきりしない今、一般誌記事索引としての MAGAZINEPLUS の存在価値はかなり低いものとなっている。もちろん網羅性を求めるなら、多くの記事索引を使うのが望ましいが、そのために必要な経費に見合うものかどうか図書館は検討してみる必要もあるだろう。もちろん過去のデータを利用するためという目的なら有用だが、それは CD-ROM で入手しておくという方法もある。

4. 検索システムの根幹はどのような索引語が用意されているか、ということである。その意味では「雑索」や「ＪＩ」は件名なしの欠陥索引である。

5. 雑誌の創刊休刊廃刊、タイトルの変更、刊行頻度の変更などは日常茶飯事であり、記事索引の編纂方針もまためまぐるしく変わるもの、記事の選択は原則があっても実際には恣意的なものである。したがって索引の内容の説明をきちんと見ることはもちろん大切だが、それでも見えない部分は多い（データベースはブラックボックスなだけになおさら）ので、索引を当てにしすぎないことが利用する側で留意すべきことと考えられる。

索引が作られていても、全ての記事が索引に載るわけではない。多くの雑誌記事はその時その時誰かに読まれて忘れ去られ、検索しようもないために殆ど存在しないも同じ状態になって消えて行く。書かれたものとて消耗品なのだとつくづく思われる。何もかも同じように探すことができ入手することができる時代は当分来ないだろう。

常々実感してきたことで、また既に水上が指摘していることでもあるが、住居、育児、園芸、釣り、写真、模型、無線、音楽、囲碁、スポーツ、車などいわば実用的、趣味的な分野の雑誌については今も昔も全くといってよいほど索引は作られていない。私はこのことは図書館や情報関係機関の、趣味的な世界に対する伝統的な軽視、差別といったものに起因しているような気がしてならないが、どうだろうか。一般誌によくある刃傷沙汰の裏話やゴシップ記事は見つけられても、花の育て方やスピーカーの作り方の記事は探せなくてよい、とは私には思えない。私がずっと望んできたのは、「雑索」がもっと利用者志向の索引を作ってくれること、代表的な雑誌だけでもいいから趣味的な分野の雑誌もなんらかの索引に採録されることである。

注

(1) 水上樹美久　「一般誌を対象とする記事索引—大宅壮一文庫雑誌記事索引総目録を中心に—」『書誌索引展望』　vol.15, no.4, 1991, p.1-9.

(2) 国立国会図書館OPACの雑誌記事索引採録誌一覧の中に「『雑誌記事索引』の成り立ち」「雑誌記事索引採録誌選定基準」「雑誌記事索引記事採録基準」が掲載されている。

(3) 日外アソシエーツ　http://www.nichigai.co.jp

(4) 国立国会図書館逐次刊行物索引課「『雑誌記事索引』の新しい計画について」『国立国会図書館月報』no.412, 1995, p.2-11.

国立国会図書館逐次刊行物索引課「雑誌記事索引の業務改革　一九九四年～二〇〇〇年」『国立国会図書館月報』no. 464, 1999, p.2-18.

（本学教授）